

旅路

小山工業高等専門学校 福田 萌々香

自分のアイデアで人を助けることができたなら、どれだけ幸せだろう。小学生の頃、福祉をテーマに授業が行われたときに思った。もともとモノづくりが好きだった私は、ユニバーサルデザインというものを知って、なんて可能性に満ち溢れているのだ、と思った。そのとき目にした力の弱い人でも使うことができるはさみは、今でも記憶に深く刻まれている。もし、このような独創的なアイデアと機械を組み合わせることができたら、ユニバーサルデザインの幅が広がるのではないか。その思いがきっかけとなって、私は技術者を志すようになった。

私が機械に興味を持ったのは、整備士だった父が日常的に機械をいじっていたからだと思う。私にはさっぱりわからない部品の数々を、工具を使って巧みに組み立てていく背中がかっこよかった。今、父の実家に遺されている大量の部品や工具に、私が目を輝かせていることを父は知っているのだろうか。私は今、憧れていた高専の機械工学科に所属している。また、ロボコンプロジェクトに参加し、日々モノづくりの経験を積んでいる。父が使っていた工具の名前を、専門の授業で習ったときは、夢に向かって着実に進んでいる実感が湧いてとてもうれしかった。

加工をしていると、油で手が黒くなることがある。せっけんで洗っても、なかなか落ちないので嫌がる人もいるだろう。けれど、私は黒くなった自分の手を見ると、胸が熱くなる。それは、幼いころから見えていた父の手も黒かったからだ。父の手から油の色が消えたのを見たのは、父が整備士として働けなくなったときが初めてだった。

人の死を初めて目にしたとき、私はまだ十歳にもなっていなかった。棺の中で眠る父を最後にお見送りしたとき、もう一生話すことも会うこともできないということに気がついて、離れたくなかった。そのときは、どうして人の身体を燃やさなければいけないのだ、と思っていた。エレベーターのような扉が閉まり、スタッフが一礼をしたとき、耐え難い現実には涙を流した。その待ち時間の間、大人たちは世間話に花を咲かせていた。意外とみんな明るいな、と驚いたのを覚えている。しばらく時間が経ってから、みんなが一室に集まった。台のようなものがあり、そこを大人たちが取り囲んでいた。あれはなんだろう。まだ視力が落ちる前だったので、白い何かを認識することができなかった。私と姉は、部屋の外で待っていて、親戚のお姉さんが私たちのことをみていてくれた。

「お父さんはね、天国へ行ったんだよ。」

白い何かを見つめながらそう言われて、あれが骨だということに気がついた。父は天国に行ったと言うのなら、じゃああれはなんだっていうの。そう心の中で思ったが、私たちに優しく寄り添おうとしてくれていたとわかっていたので、ただ黙って聞いていた。

家に帰ってきてから、母が白い箱を手にしてた。それは、お葬式の間、棺の隣にずっと置かれていたものだった。葬儀中、母に尋ねても教えてくれなかったのは、遺体を燃やすという現実を知らない私たちの心を守るためだったのだろうと、そのとき理解した。白い箱に「やっとなんか帰ってこれたね。」と言う母をみて、私も話にいろいろと思ったが、怖くて近づくのに時間がかかった。生身では収まるはずのない箱は、私よりも小さかった。

父はいくつかの病院に転院していた。そのうちの一つは、私の年齢では病室に入ることができなかった。他の家族には子どもを中に連れていく人もいた。うらやましい気持ちもあったが、私と姉が母に言われた通り待合室でアイスを食べながら待った。母はいつも二つ目の角を曲がっていく。いつか忍び込めるようにと焼きつけた記憶が頭から離れない。

たどり着けるかわからなかった未来に、今の私はいる。あの日描いた未来は、不透明でぼんやりとしていた。でも、辛いこと、楽しいこと、全てを糧にして今日までの日々を繋いできた。父が亡くなった後、さまざまなお変化があったが、私の技術者を志す気持ちは変わらなかった。どこを向いても聞こえてくるセミの音が夏の蒸し暑さを助長していたお盆の日、母とお墓参りに行った。お墓には、すでに花が供えられていた。買ってきた花を添える準備をしながら心の中でつぶやく。

「やっとなんか夏休みに入ったよ。今、ロボコンプロジェクトでのモノづくりがすごく忙しくて、でも楽しいんだ。去年よりも増えたの。昔はパパさんの背中を見つめることしかできなかったけれど、今はそうじゃない。きっと私は自分のアイデアで人を助けることができる技術者になる。夢に向かって進み続けているよ。」

切り終わった花を、二つに分けて供え、墓石の上からゆっくりと水を流した。表面に張られた水が、青空を映している。供えたばかりの花には、蜂がとまっていた。